



TITLE:

観測部より

AUTHOR(S):

CITATION:

観測部より. 天界 1927, 7(73): 173-174

ISSUE DATE:

1927-03-25

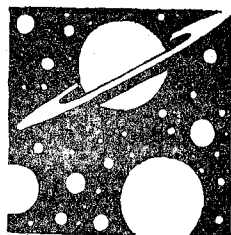
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161093>

RIGHT:



観測部より



北極光

今日十二月三日、久し振りで私の友人なる土木工科の伊久君と数学の時間一所になりました。そして彼は最近「オーロラ」を見た事を私に知らせてくれました。私は其時々聞きたかつたのですが講義が始まつたので話はそれ以上進まなかつたのでした。微分方程式の興味ある二時間の講義が終つてから私は彼を午後訪れる事を約して別れました。午後彼の教室を訪れて大體次の様なことを聞くことが出来ました。

十一月二十一日(日曜日)晴く(しかし伊久君は小樽市から毎日通學されて居るのです。この aurora も小樽市で観測されたものです)この日は彼は弟達と小樽市の郊外なる天狗山に「スキー」に出掛けました。午後三時半頃、(日は已に山に沈んで居つたそうです)東北の地平線に見なれぬ薄い赤味を帯びた光がゆらゆら(彼はカゲラウの様であつたと言つて居ました)居るので、よく氣をつけて見るに放射状をなした紅色の光が日出の時の紅さ、かなりよく似て居るが非常にすきまほつた様な光線で遠く海を挟んで見える増毛の山々は少しも之が爲にさへぎられないで、いつもの様に見えたそうです。彼はこの「スキー」場に五時頃まで居つたそうです。そしてこの光は少しも劣へずにやはりその位置に赤く光つて居つたそうです。弟達もそれを確に認めたそうです。丁度眼前にあらはれて居るかの如く彼は手を動かして、私に其模様をきかせて呉れました。そしてその時の「スケッチ」を彼にたのみましたしかしなしいことには其夜モウ一度彼が空を仰いで呉れたならばと思ひました。しかし私もこれを

aurora と認めないわけには行きません。昨年十二月 aurora の観測よりは確實です。彼もこれを aurora に違ひないと言ひますし、その光は誰が見ても一見して不思議なものであると言ふ事を認めたそうです。急いでお知らせ致します。晴れたならば北の空を眺めませう。今夜は雪がかなり降つて居ります。

十二月三日

札幌にて 米田勝彦

黄道光

一月二十三日午後七時黄道光を観測(略測)いたしました(子供に阻まれ充分の観測は出来ませんでした)が、先月より其光度一體に強く充分観測する事が出来ました。最光部の核部はカシオペアと白鳥間の銀河光度の2.5倍は充分ありました。かゝる變化は、私の知つて以來、誠に珍らしい事の様にして居ります。序に御報申上て置きます。

昭和二年一月三十日

上諏訪 三澤勝衛

紀州より

二日夜は三日早朝龍座流星雨を観測する爲諸準備を整へ、戸外に出れば西天に高くゾダイガルライトが、火星にくつゝかんばかりに延びて居り、満天の星疎に冬の星座の美しさは恍惚たらしめるといふより、私は肺膽をつらぬかるゝの思ひが致しました。

直に黄道光観測。其結果、黄道光の中心線が黄道に一致して無く、稍南にふれて居る様に認められました。木星或は火星、銀河等によるイリュージョンがあるんだらうかさも疑ひましたが、兎に角、結果はその様なものでした。(結果は記録

と共に別に御送り致します)

三日は二時起床、輻射點がまだ低いと思つたので十二月初めに求めたオリオン^{ミュー}の「流星」を読み観測についての参考事項を想起し、三時頃戸外に出ました。宵にも増して美しい星々、更に驚くべき事には殆んど獅子座の中央まで、東天に黄道光が伸びて居るのではありませんか。これも早速観測、収獲の一つに加へて置きました。風はあまりなかつたが、何と云つても冬の真夜半すいふんつめたい思ひをして、約一時四十分間北天をビジランスやりました。

その結果は龍座流星群に属するものは以外に少く北斗の近く附近で、北斗の頭部に輻射點を有するものを可成捕へる事が出来ました。星圖に記入した個数は二十八個。別紙報告を御覽願ひます。妹が起きて来て記入出来なかつた分を数へておましたが、観測を終つた頃には四十幾個の多數を読んでおました。

三日の午前中は観測結果の整理。

四日も同じく午前三時より出勤、薄雲は可成廣がつて度々観測を妨害されましたが記録個数は前夜のものよりも多く三十四個。然も観測時数は前夜よりも二十分少く一時間二十分であります。結果は目的の焦點たる龍座流星群は大部分をしめ、一部には北斗の附近を輻射點とするものもありました。學生の時(丁度五年前)津山の空を妹と二人——先生の暗示により——観測し、八個の龍座流星群をさらへた過去を追憶し、痛快禁じ得ぬものがありました。

四日午前十一時

小 横 孝 二 郎

大 阪 よ り

賑やかな冬の空がめづつて参りました「六時」の眺に悦んでゐます。火星近接の折、學校兒童五年以上五百名に對し、一通り七十五倍でのぞかせました。數十葉のスケッチが提出せられましたが、星面の模様を明視したものはありません。あの色収差の現象は迷はされたものか大へんに多かつた事に気がつきました。注意せねばならぬ事の一つだと考へました。

木星を見せた時は大方ベルト三筋を認め得た様でした。夜空が悪かつたので、一邊通り見せ終るまで中々長くかかりました。

一月十日

大 阪 津 田 雅 之

月 齡 に 就 て

何月何日の月齡を知り度い事はよくあるが、太陽曆を使つてゐる吾々にはすぐ分らない。勿論曆を見ればよいのであるが、簡単に又、かなり正確に知る方法がある。

例を以て説明した方が早いから本年三月一日の月齡を求める事にする。

1927年	(1927-1911) × 11 = 176
3月	0
1日	+ 1
	1 7 7
	— 1 6 0
	2 7

即ち西曆から1911を引き之を11倍し、下の表から其月に相當する數を取り、日はそのまゝ加へ、30の倍數を引けるだけ引けばよいのである。

本年三月一日は月齡27で、曆をよく一致する。勿論簡便法であるからたまに一日位の差は出来る事もある。

月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
加べき數 0 2 0 2 2 4 4 6 7 8 9 10
要するに上の數を覚えて居ればよいのであるが、それには鬼鬼二四白七八九十と記憶するをよい。

以上はかつて或雑法に出て居つたのであるが、使つて見て中々便利であるから御傳授する事にした。

池 田 政 晴

オ ー ロ ウ 出 現 !

(時日)大正十五年十一月二十一日

(方向)東北ノ地平線上

デンクヤマ

(観測場所)小樽市郊外天狗山

(観測時間)午后三時半ヨリ午后五時過ぎマデ

(観測者)伊久秀春(北大工學部學生)其他數人

(形)放射狀

(色)紅(ウスミチナヒタ、スキミウツタ先テアツタ)